

いじめに関する研究

—大学生を対象にして—

永瀧 諒香 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 柴田 俊和

キーワード：中1ギャップ，思春期，異年齢集団

1. 緒言

近年の学校問題で新聞の1面を大きく飾る「いじめ問題」は、各メディアでも連日大きく報道されている。著者は、本当にこんな多くの「いじめ」が学校現場で起こっているのかと疑問を抱いていた。なぜなら、インターンシップや教育実習で小学校や高校に入る機会があったが、「いじめ」を目撃することがなかったからだ。「いじめ」は成長段階のどの時期に、何が原因で起こっているのだろうかを明らかにすることを本研究の主な目的にした。今回の調査によって「いじめ」の実態把握に努めると共に、課題解決の糸口をつかみたいと考えている。

2. 研究方法

本研究では本学の学生にこれまで自分が体験・経験してきた「いじめ」の実態や考えをアンケートにより調査する。

アンケート対象：B大学 学生 130名

3. 結果と考察

アンケート調査の結果、いじめられたもしくはいじめたという経験のある学生が34.1%もいることが明らかになった。「いじめ」の発生時期は小学校高学年から中学校の時期に集中していることが分かった。「いじめ」発生は、「無視」や「仲間外れ」などの軽率な行動から、「暴力」や「暴言」行為になり、「いじめ」に発展していくことが多いことも明らかになった。「いじめ」を経験したことがない学生の回答では、「いじめ」という行為のイメージに「いけないことだとおもう」と考えている者が多いことが明らかになった。しかし、同時に「双方原因があり、いじめは発生している」と考

える学生が多かった。この調査結果から、「いじめ」はいけないことだが、「いじめられる側」にも原因があると考えている学生が多いということも明らかになった。

また、「いじめ」の原因としては、「いじめられたからいじめ返す」といった傾向があることも明らかになった。

4. まとめ

アンケート調査の結果から、「被害者だった」被害者が「加害者」をも経験していること、その逆の体験も確認することができた。また、いじめのメカニズムや原因が、今回の調査によって明らかになった。高学年から中学生の時期には特に目を光らせて子どもたちの小さな変化も見逃さない日々の観察を行うことが、教員の課題となってくる。子どもたちの少しの変化にも目を光らせていれば、早期発見は十分に可能だからだ。

そして、「いじめ」をゼロにするために、「いじめ」はどのような悪影響を人に及ぼすのかを道徳の授業などで指導・伝達していくことが大切なことではないかと考えられた。また、「いじめ」の現場を目撃した時には、子どもたちをより良い方向に導いていけるような指導ができるようになりたいと思っている。

引用・参考文献

1. 文部科学省(2014)児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査。
2. 小林成彦 (2013) 大津中2いじめ自殺, P HP新書。
3. 尾木直樹 (2013) いじめ問題をどう服するか, 岩波新書。